

## 訛りと方言、丸出しで 三木亮介

昭和三十五年（一九六〇年）四月、私は小学六年生になった。それまでに、同級生だった何人かが、ぼつりぼつりと都会へ転校して行った。

わが家の夕食の折、何回か両親や祖父母が、「この前は、どここの誰それが神戸に行ったが、今度は、誰それが大阪に行くらしい」などと話しているのを聞いたことがあった。だが、子どもだった私は、同級生がなぜ転校してしまうのか、本当のところは分からず聞いた。

当時、全国の農山村から多くの人々が都市部へ移動し、私のふるさと兵庫県北東部の山村からもたくさんの人たちが、主に京阪神地域や瀬戸内臨海部へ移り住んだ。同級生の転校は、その『はしり』であったことを成人した後知った。

転出した人たちは、それぞれの地で懸命に働いてきた。やがて、慣れない都会で互いに親睦を深め、助け合い、郷愁の尽きないふるさとの山河を語り合おうと、百名を超える人たちが参加し『郷土会』を発足させた。昭和四十二年（一九六七年）のことである。

発足当初の会員は、私の親世代に当たる人々が中心であった。その後、私たちの前後の世代や子ども世代へと引き継がれてきたのだが、ふるさとを後にした理由はさまざまであった。

「家は長男が継ぐもの。次男、三男は家を出るのが当たり前の時代だった。だから都会へ出るしかなかった」年配の会員がこう述懐するのを聞いたことがある。また、「子どもの頃から田舎が嫌で、早く都会へ出たい」と思っていた人も少なからずいた。他方、「いつかは帰郷したいと考えている」という人もいた。

ところが、私の場合もそうなのだが、就職や進学後そのまま都会で居を構え、その後の本人や子どもたちのやむを得ない事情により、帰郷の機会を逃した人や帰郷したいという気持ちに変化が生じてしまった人など、実にいろいろな背景を持っている。

年に一回開催される『郷土会』の懇親会。再会を喜ぶ会員が手を取り合い、笑顔で言葉を交わしている。

「久しぶり。元気だった」

「まあまあ。ちょっと膝の具合が悪くなってきたけどな」

「商売は、まだやってるの」

「息子に譲ったよ。店番をして手伝っているくらい」

それぞれの近況報告に始まり、子どもの頃の楽しかった思い出やちょっと苦い話も出てくる。過疎高齢化の進むふるさとの厳しい様子、それに負けずふるさとで頑張る人たちへの感謝や今後の期待など、みんなの想いがあふれ、会場はいつも賑やかである。

ただ、そうはいうものの、同郷の生まれなので少々の行き違いはお互いに許せるとしても、同郷であっても相性が合わない人もいるし、すべての事柄に考えが同じ人たちばかりというわけでもない。

なかには、懇親会で「どこの集落の生まれ?」、「親の名前は?」と何人にも尋ねられることにうんざりする者や、「話題は年寄りの昔話が多く、参加してもそんなに面白くない」と感じる者など、次第に『郷土会』を敬遠する人たちもいた。

また、同郷であるがゆえに、みんなには負けられないという気持ちが必要以上に持っている人たちもいたり、同じ仕事に就いている会員同士が互いに牽制し合い、懇親会が気まずい雰囲気になることもあった。

このように、『郷土会』がいつも平穏で順風ばかりではなかったことも承知のうえで、私はなお思う。

私にとって『郷土会』は、初めて飛び出してくる話などもあり、ふるさととのつながりを感じさせてくれ、「自分はやっぱりあの山村で生まれ育った人間なんだ。あの山村が私の基を作ったところなんだ」とつくづく噛みしめる時間と場所であった。

さらに、かつての上司部下のタテの関係や、現在の地域の人々や趣味仲間との横並びの関わりとは一味違い、時に聞きなれた方言や訛りが飛び出し、多くの言葉を尽くさずともどことなく通じ合う雰囲気があったよう、そんな何ら身構える必要のない気持ちのなごむ機会でもあった。

ある年の懇親会で、年配の女性から懐かしそうに話しかけられた。

「大きなあんたをいつも背負い、子守りをしていたお姉ちゃんによく遊んだよ。お姉ちゃんの細い首が、あんたの重さで折れないか心配だったわ」。——そういえば、姉が、「みんなと遊んでいて怖いところを通るとき、友だちはさあつと逃げるけど、私はあんたをおんぶしていたので、思うように走れず怖い思いをしたわ」と話していたことを思い出した。

私は姉ちゃん子だったのだ。もう八十歳になる姉に今度会ったら忘れずにお礼を言おう。

別の年には、先輩の男性から以前からの知り合いのように親しく声をかけられた。「ずいぶん昔、田舎の山裾にあるあんたの家の墓参りをしたことがあるよ。俺のひいおばあさんの姉か妹の墓だと聞いたけどな」。——それは初耳だ。ということ、私のひいおじいさんの奥さんの墓のことだな。すると、この先輩とは三代前からのれっきとした親戚になるんだ。そうかい、ちょっと嬉しいなあ。

最近の懇親会では、同級生が近づき、ニヤニヤしながら話し出した。

「あんな、小学六年の時に、校長室の天井裏にもぐりこんで、校長の頭をホコリだらけにしたんじゃ。俺たちみんなは廊下に横一列に立たされ、顔を真っ赤にして怒った教頭から長い長い説教を食らったぞ。——そんなことあったなあ。覚えてるよ。えっ、首謀者はこの私ってか、そうだったかなあ。確かに私は少々腕白坊主だったけどな。」

『郷土会』発足から既に半世紀を超える。会員たちは、経済や社会の状況が激しく移り変わるなかで、それぞれの家庭や職場、地域でささやかながらも懸命に時を刻み、今日という日を迎えている。

残念なことだが、『郷土会』も高齢化が年々すすみ、懇親会への出席者は昨今三十名前後になっている。そのうえ、令和二年（二〇二〇年）からの新型コロナウイルスの流行により、高齢者の多い会員の安全第一を考え、三年続けて懇親会は中止になった。

時々、一部の会員と電話でやり取りはあるものの、やっぱり物足りない。

来年こそはみんなとの再会がかない、いくつになっても直らない訛りと方言を知らず知らずのうちに丸出しにしながら、ふるさとのよもやま話に花を咲かせたい。

鬼は笑うかも知れない。が、後期高齢者に間もなくなろうとしている私は今、そんなことをしきりに思っている。